「神の子とされた恵み」　　ヨハネの手紙第一　３：１－７

序論

先週は、シャローム感謝会が祝福のうちに持たれました。しばらくお姿を拝見していなかった方々のことも動画で見ることができて、嬉しく思いました。ここ数年の間はコロナのことがあって、教会の活動も制限されていましたから、今年は一緒にお食事ができたことも、特に感謝したことでした。

シャローム感謝会は、蛍池の恒例行事ですが、それは単なる「催し」ではありません。エペソ２：２１のみことばに、「あなたがたは・・・神の家族なのです。」とあるように、教会に集う私たちの交わりは「神の家族」の交わりなのです。同じ神様を仰ぎ、同じ神様を礼拝する私たちは、キリストにあって一つです。

通常、家族には血の繋がりという強い結びつきがあります。しかし、家族のきずなはそれだけではありません。家族のそれぞれが自分の人生を生きながらも、喜びや悲しみを分かち合いながら人生の節目をともにします。良いときも悪いときも運命をともにするのが家族です。新しい家庭をつくるろうとする男女が、結婚式で「富めるときも貧しいときも」、「病めるときも健やかなるときも」、「喜びのときも悲しみのときも」相手を思いやることを誓約するのは、そのような中でも共に生きていくのが「家族」だからです。

教会の兄弟姉妹は、この同じ時代の、同じ蛍池の群れにおいて、信仰生活をともにしていく運命共同体です。それぞれの立場は違っていても、信仰という同じ道を歩み、キリストからいただいた、同じ新しいいのちに生きています。そういう神の家族の交わりの中で、シャローム感謝会では、神さまからいただいた長寿の恵みを喜び分かち合いました。

また、今日はこの後、墓前集会にて、地上の生涯を走り終えた、信仰の先輩たちを偲ぶときがもたれます。

神の素晴らしい愛によって

さて、今朝のみことばを見ていきましょう。教会は「神の家族」であると言いましたが、これから見ていくように、それは私たちが「神の子ども」とされることによって、父なる神様と結び合わされてできた家族になります。ヨハネによる手紙の第一の３章の１節のはじめの部分をお読みします。「私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどんなにすばらしい愛を与えてくださったかを、考えなさい。」

この箇所から３つの点をお話しします。

①一つ目は、この文の一番の強調点は「神の愛」にあるということです。

この部分を直訳すると、「見よ。何と素晴らしい「愛」、御父が私たちに与えてくださった、私たちが神の子と呼ばれるために」となります。私たちの聖書で「考えなさい」と訳されている言葉のもともとの意味は、「見よ」とか「心に留めよ」という意味の言葉です。英語で言うなら、「See」や「Behold」です。実際、英語の聖書では、そう翻訳されています。そして、原典のギリシャ語で一番の強調されているのは、「見よ」の次に来ている「素晴らしい愛」です。ヨハネは、この箇所で、「御父が私たちに与えたくださった素晴らしい愛」、「私たちが神の子と呼ばれるために与えられた素晴らしい愛」を心に留めて、よく考えよと言っているのです。

②2つ目は、私たちは生まれつきの「神の子ども」なのではないということです。

ここでは「私たちが神の子どもと呼ばれるために」と言われています。私たちは、謂わば「養子」のように、あとから「神の子ども」とされた者であるということです。

ここでは触れられていいませんが聖書の他の箇所では、「神の子ども」とされる前の私たちは「神の敵」であったと言われています。

エペソ書では、「自分の背きと罪の中に死んでいた者」、「生まれながら御怒りを受けるべき子ら」と言

われています。ローマ書はさらにはっきりと「敵であった」と言っています。生まれつきの私たちは、神さまのことを気に留めず、無視し、神さまの言葉を蔑ろにして、背いて歩んでいました。

それは、私たちの先祖であるアダムとエバが、神さまに禁じられていた果実を口にして以来、私たち人間の心に潜んでいる罪の故です。アダムのエバは、「それを食べるとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となる」とそそのかされて罪を犯しました。そこには、「自分が神でありたい」という高慢な思いが潜んでいます。私たちの感情は、「自分が良いと思うことが良いこと、自分が悪いと思うことが悪いこと」のように、自分を規準とし、自分が中心でなければ我慢できなくなっています。「自分が神でないこと」を受け入れるのに苦痛を覚えるのです。そうやって私たちは、生まれながらにして、神様に敵対し、この身に神の怒りを集めてきたのでした。

そんな私たちを、神さまは「神の子ども」と呼んでくださろうと、愛の手を差し伸べてくださり、そして実際に「神の子ども」として招き入れてくださいました。

③ただ神の愛によって、私たちは神の子どもとされるということです。

今見てきたように、私たちが「神の子どもと呼ばれる」のは、私たちがそれにふさわしいからでは決してありません。私たちが「神の子どもと呼ばれる」理由があるとすれば、それはただ、そう呼んでくださる神さまの愛の故です。私たちの側には「神の子ども」とされる理由はありません。ただ神さまの側に理由があるのです。その理由は、私たちに向けられた神様の愛です。

聖書の中の聖書と呼ばれるヨハネ３：１６のみことばも、この神様の愛について語っています。「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**」

ここに「そのひとり子をお与えになったほどに」とあるように、この神様の愛には犠牲が伴っていました。イエス・キリストの尊いいのちという犠牲です。イエス様は、「ひとり子」と呼ばれているように、まことの「神の御子」です。今日は三位一体について詳しく述べませんが、聖書をよく読むなら、父なる神と、子なる神であるイエス・キリストと、御霊なる神である聖霊との三者は、みっつにしてひとつである三位一体のの神であると言われます。神の御子というのは、私たちと違ってイエス様がまことの「神の子」であることを説明する言葉です。聖書は、神の御子が人となられて、天から地上に遣わされたと教えています。それがイエス様です。

次に挙げるＩヨハネ 4 章の次のみことばもまた、御子イエス・キリストの尊い犠牲に神の愛が示されていると述べています。**|9|神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに 示されたのです。|10|私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。**イエス様は私たちの罪の身代わりとなって、十字架の死によって神の怒りを一身に引き受けてくださいました。言わば、私たちにが受けるべき罰を代わりに受けてくださったのです。それによって、もともと死刑に定められていた私たちは、「死」を免れて、イエス様から頂いたいのちによって生かされるものとなり、私たちは「神の子ども」とされました。これが、神さまが私たちを「神の子」としてくださる為に示してくださった「愛」です。ヨハネが、よく考えるようにと、こころを留めるようにと言った「素晴らしいの神の愛」です。

事実、神の子とされている

さて、ヨハネは、1節の続きで「**事実、私たちは神の子どもです。**」と述べています。神さまは、ただ単に「神の子ども」と私たちを呼ばれるだけでなく、実際に神の子どもとしてくださっているということです。クリスチャンであっても、なかなかそれを事実として受け止められないということがあります。自分

が「神の子ども」とされたなんて到底思えない。むしろ、それが普通かもしれません。

このことについては、次のような例えが、私たちの理解を助けるでしょう。

私たちはある時、法廷に立たされました。そこには私たちの罪を攻め立て告発するサタンがいました。反対側には、私たちを弁護するイエス様がいました。この法廷を治め、正義の判決を下す裁判官は父なる神様です。告発されている内容から見れば、私たちの有罪は明らかでした。そして、案の定、有罪の判決が下されました。ところが驚くべきことに、弁護人であるイエス様が裁判官に執り成しを求めました。裁判官が、正義のゆえに刑罰は執行されなければならないと言うと、イエス様が私がその刑罰を身代わりに受けると言い、そのとおりにされました。それによって、私たちは刑罰を免れ命びろいしました。

裁判が終わって表に出ると、見覚えのある人が、私を待っていました。それはさっきまで、裁判官を務めていた父なる神様でした。そして、このようにあなたに声を掛けました。「あなたは罪ゆるされて、今や自由の身となった。あなたの代わりに刑罰を受けた弁護士は、実は私のただ一人の息子だった。あなたが悔い改めているのを見て、息子も私もあなたを助けたいと思ったのだ。あなたの罪は赦されたが、告発する者たちがうようよしているこの世界に再び出て行かなければならないけども、行く当てはないのではないかね。私のところに来なさい。私はあなたのために命を捨てた息子のゆえに、あなたを私の子どもとしよう。私の家に来て、私とともに住みなさい。私があなたの父となろう。」

私たちも、このように父なる神様の子どもとされたのです。養子として神様の子どもとして迎えられた私たちは、正式な法的な手続きがなされ、事実、公に法的に「神の子ども」とされました。

しかし、法的に公に「神の子」どもとされたからといって、直ぐにその関係が親子らしくなるわけではありません。プライベートに実質的に「神の子ども」になったという感じはまだないかもしれませんが、それでも私たちは既に、法的に正式に「神の子ども」という身分にされているのです。

ヨハネはこう続けています。「**世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。**」世は私たちを知りません。世にとって、私たちは取るに足らない者でしかありません。キリストを信じてどうなるんだ、何が変わるんだと思っています。実際のところ、クリスチャンになったといっても、依然として私たちには罪があります。失敗もします。世の人々からすれば、私たちは何も変わってないようにみえるでしょう。しかし、私たちの身分は変わりました。人の目にそう見えなくても「事実、神の子ども」とされているのです。

キリストに似た者とされる

過去、罪の中に死に、神さまに敵対して歩んでいた私たちは、今や神様の愛によって、神の子どもとされました。これだけでも、とてつもない大きな恵みです。ヨハネが言うように、父なる神様が与えてくださった愛は、どんなに素晴らしい愛でしょうか。

しかし、神の子どもとされた恵みは、まだまだこれで終わりではありません。ここから始まる未来への祝福が、神の子どもたちには約束されています。神の子どもとされたことで、私たちには祝福された「未来」が開かれました。神様は私たちに「未来」も与えてくださったのです。

2 節。「**愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。**」「今すでに神の子どもとされている」その恵みも測り知れない大きなものですが、私たちに与えられている未来の祝福も想像できないほどに大きなものです。そしてその素晴らしさは、まだ私たちには明らかにされていません。ただ、その一部は明らかとなっています。

それが 2 節の続きの部分に記されています。「**しかし、私たちはキリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。**」

これはどういうことでしょうか。Ｉコリント１３：１２で、パウロがこのことをもっと詳しく語っています。「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」

昔の鏡ですから、今と違ってぼんやりとしか映りません。今私たちは、キリストの事も、父なる神様のことも、実はぼんやりとしか分かっていないのです。どれだけ素晴らしい愛を与えていてくださったと感じても、それは神様の愛のほんの一部でしかありません。イエス様がどんなに素晴らしいお方であると感動しても、それはまだイエス様の素晴らしさのほんの一部分だけしか見ていないのです。

ヨハネは、この手紙のはじめで、「御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証しして、あなたがたに伝えます。」（１：２）と語っていました。ヨハネは、イエス様のことを見て、この方こそ「私たちに現れた永遠のいのちだ！」と、喜びを持って紹介したのですが、それもまだイエス様の素晴らしさの一部分でしかないのです。なぜならヨハネも私たちも、まだぼんやりとしか見ることができないからです。

私たちが「ありのままのキリスト」を見ることができるのは、次に「キリストが現れるとき」です。聖書は、十字架で死なれたイエス様は３日目に甦って、多くの人々の前に現れた後に、天に昇って行かれ、今は天に居られて、私たちのために執り成し祈っていてくださると教えています。そしてさらに終りの時に、再びこの世界に来られて、世界をさばき、万物を新たにすると教えています。いわゆる、「再臨」と言われるものです。

キリストの再臨のとき、私たちはキリストをありのままに見るだけでなく、そのキリストに似た者へと変えらます。これが神の子どもとされた私たちに約束されている「未来」です。

そこには、犯したくない罪を犯してしまう、弱い私たちはもはやいません。愛したいと思っても愛することができない、心が渇いた私たちは、キリストのように愛に満ちたものとされています。キリストが私たちを愛してくださたように、私たちも互いに愛し合い、お互いを満たしあうことができるようになるでしょう。

望みが、生き方を変える

３節「キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」

イエス様のことを信じている私たちは、「キリストに望みを置いている者」であるはずです。ここでヨハネが言っているのは、もしキリストに「望み」を置いているなら、私たちの生き方が変わるということです。「望みを抱く」というのは、それが実現する日を待ち望みながら生きることです。「望み」は、私たちに期待をもって、自発的にそれに備えるようにさせます。その日を楽しみにし、そのことのために、今できることを自然としたくなります。

たとえば、子どもを授かったことが分かると、両親は生まれてくる子供のことを喜び望みつつ、いろんな準備をするでしょう。名前を考えたり、オムツや服を買ったり、子育てについて学びはじめたり、仕事を調整して生まれてくる子どものための環境を整えていきます。それらを行うことは彼らにとって喜びです。待ち望むというのは、こういうことではないでしょうか。

キリストに望みを置いている者も、それと同じように、キリストと顔と顔を合わせて会う喜びの日に備えて、自分自身をキリストにふさわしく整えたいと願い、喜びを持ってそれを行います。

自分をきよくすることは、私たち自身の力ではできないことです。しかし、御霊に励まされて、私たちは自分を清くしたいと願うようになり、御霊に導かれる中でいつの間にか清くされていきます。私たちの

うちに、罪の弱さはまだ色濃くありますが、父なる神様は子どもである私たちの成長を願い、必要な助けを与えてくださいます。私たちの戦いは、自分の力を増すことではなく、キリストにとどまり、キリストを知っていくことにあります。

いのちを与える神の愛

今朝は、「神さまの素晴らしい愛」についてよく考えるようにと、ヨハネが言っていたことを見ました。「愛」という言葉は便利で、ついつい多用してしまうのですが、今日は「愛」について少し考えてみたいと思います。

みなさんが「自分が本当に愛されている」と感じるのはどのような時でしょうか？また、「愛されている」と感じたときにはどのようになりますか？心の深いところが満たされたり、前向きになれたり、頑張ってみようという力をもらえるのではないでしょうか？そうやって、内側に与えられる力は、私たちの生きる力となり、わたしたが生きていくうえでの希望となります。

私は、聖書が語る「愛」は、そのように相手のことを生かす「愛」だと思います。別の言い方をするなら、「相手にいのちを与える」ことだと思うのです。「愛」は自分の利益を考えないと言われますが、それは相手の益となることを優先するということです。いくら自分の益を考えない無私の心からといっても、相手の益とならないことをするなら、それは親切の押し売りというものです。相手が愛されていると感じることはありません。

神さまが、私たちを「神の子ども」とするために与えてくださった愛は、まさに私たちにいのちを与えるものでした。そのためにイエス様は、十字架でご自分のいのちを捨ててくださいました。自分のいのちを私たちに差し出し、与えてくださったのです。

またイエス様の十字架は、私たちと神様との和解をもたらしました。いのちの源である神様のもとに立ち帰ることを可能にしてくれました。放蕩息子の例えで、父親は帰ってきた弟息子のことを、「死んでいたのが甦った」と兄に言っています。イエス・キリストを信じる者には、永遠のいのちが与えられるというのが、聖書の約束です。

私たちはキリストのいのちにつなげられ、その命に与る者とされました。新しい命に生きる者とされました。神の子どもである私たちは、イエス・キリストのいのちに共に与っています。神の子どもの交わりには、キリストのいのちが満ちています。

互いに愛し合うというのは、キリストからいただいたいのちをお互いに分け与えることです。それは、感情ではなく、行動によって示す「愛」です。

まとめ

最近、ふたたびコロナ感染者が増加傾向にあるというニュースも聞いています。そういう中で先週のシャローム感謝会には、神さまを中心とした交わりの喜びがありました。同じ神様を信じ、同じ神様を喜び、お互いの存在を喜び合う、そういう教会の交わり＝神の家族の交わりが、これからもこの教会の中で豊かにされていくことを願っています。

同じ神さまを信じる者がともに集い、神さまを喜び、お互いの存在を喜ぶのは、この礼拝も同じです。私たちは、今朝、時間を取り分け、神さまのもとに集まりました。そしてみことばという糧を、ともに、神さまからいただきました。そういう意味では、今朝のこの礼拝も「神の家族が集う食卓」です。

それは、イエス様が、「人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。」と言われた、天の御国の前味です。

お祈りしましょう